

獨協大学 ニュース

DOKKYO UNIVERSITY
NEWS

7

2020

VOL.469

学部長メッセージ

安井 一郎 国際教養学部長

仕事の現場から

安達 友行さん (13年済卒・東日本電信電話株式会社)



Cover View

緑の回廊と天野貞祐記念館(中央棟屋上より)

 DOKKYO UNIVERSITY

A DEAN MESSAGE
学部長メッセージ今問われる
「学び」の意味

国際教養学部長 安井 一郎

YASUI Ichiro
筑波大学(教育学修士)■専門
教育課程、教科外教育■担当科目
道徳教育の理論と実践
教育実習指導
教育課程論 等

従来の大学生活の日常が大きく変わらざるを得なくなっていました。ここで問われるのが、現在の状況が収束した後の大学の日常をどう考えるかということ。元の状態に完全復帰するのか、それとも、この経験を基に大学における「新たな日常」を創り出していくのか、教職員、学生共に、どの方向に進もうとするのか、問われてくるのではないだろうか。

学びとはかかわる(再び)

5月18日の『日本経済新聞』朝刊に掲載された「遠隔授業 現場では」という記事で、横浜創英中学・高等学校校長の工藤勇一氏が次のように述べています。「学びとは本来、主体的なものだ。しかし日本の教育は子どもに手をかけすぎている。学力向上ばかりを唱え、そのためのサービスを与えることに躍起になり、結果として学習時間は伸び続け、最も大切な主体性・自律性を奪ってしまっている。サービ스에慣れた子どもは次第に際限なくサービスを求めるようになる。」⁽¹⁾その上で、「自学と協働を中心とした自律型学習」への移行の必要性を示しています。遠隔授業は、単に課題提示、オンデマンド、リアルタイム双方向といった授業の形式を意味するものではありません。大切なのは、先生がいて生徒がいてみんなと一緒に同じ教室でという対面式の授業で、ともすれば見過ごされてしまうことがあった「自らを自律的な学習主体として確立する」ということです。教室という固定的な時間と空間を離れ、自分自身の学び

の場を主体的に整え、個性的な学びを創り出していくことに、遠隔授業を充実させることの真の意味があるのではないのでしょうか。

昨年の第22回学部長メッセージで、宮城教育大学元学長の林竹二氏の「学び」ということは、覚えこむことは全くちがったことだ。学びとは、いつでも、何かはじまることで、終わることのない過程に一步ふみこむことである。(中略)学んだことの証はただ一つで、何かがかわることである。」⁽²⁾「*」(は筆者)を紹介し、それは、「大学は学問を通じての人間形成の場である」という本学の建学の理念にも通じている、と述べました。この意味をもう一度考えてみましよう。

工藤氏の発言、林氏の発言どちらにも共通するのは、「学びとは他者から与えられるものではなく、他者とのかわりの中から自ら創り出していくもの」という考え方です。今回の新型コロナウイルスとのかかわりの中から、私たちはどのような学びを、どのような大学生活を創り出していくのでしょうか。対面授業に戻るにせよ、「遠隔と対面のハイブリッド型の授業」⁽³⁾になるにせよ、私たちは学んだことの証をどのように表すのでしょうか。遠隔授業を通してその答えを見つけたいと思います。

(執筆日)2020年6月1日

(1)工藤勇一「遠隔授業 現場では」『日本経済新聞』2020.5.18朝刊14面

(2)林竹二「教えるということ」(国土社、1999年)、pp.105-106

(3)工藤 前掲書

新型コロナウイルスと
大学における「新たな日常」

1月に日本国内で新型コロナウイルス感染者が確認されてから既に4ヶ月、この間、最前線の医療現場をはじめ、様々な場所で新型コロナウイルスとの戦いに尽力されてこられたすべての方々に心よりの敬意を表します。また、残念ながらその中でいのちを落とされた方々に深く哀悼の意を表します。5月末現在、日本では、ようやく沈静化の兆しが見えてきました。が、世界に目を向ければ、まだまだ感染拡大が続いている国々があります。「人類の歴史はウイルスとの戦いの歴史である」と言われますが、その戦いに勝利し撲

滅できたのは天然痘だけと言われるように、むしろ私たちに求められるのは、どのようにウイルスとつきあい、共に生きていくのかということではないでしょうか。

日本でも、この秋から冬に感染の第二波、第三波がやってくるのが指摘されています。そこで、最近よく言われるようになったのが、「New Normal」新たな生活様式「新たな日常」といった、ウイルスとの共存共生を前提としたライフ・スタイルの提唱です。本学でも、3月以降、卒業式や入学式を始め様々な行事等の中止や延期、教職員・学生の大学構内への立ち入り制限及び施設の利用禁止等の措置を取りました。また、5月25日から始まった春学期の授業をすべて遠隔授業とするなど、

コロナで学業継続が困難になった学生のために 専任教職員が寄付金で支援

獨協大学は5月26日、経済的に困窮する学生のため、新たに学業支援寄付事業を創設した。この事業は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、学業の継続が困難となった学生を本学専任教職員の寄付により支援しようというもの。目標額は3千万円で、期間は2021年3月31日まで。集まった寄付金は、学生の学業継続支援のための奨学金に充てる。6月20日現在、88名から14,348,817円の寄付の申し出があり、学生に対する支援が広がっている。

2020年度春学期授業開始

5月25日、2020年度春学期授業を開始した。本学では、春学期の授業はすべて遠隔授業（オンライン授業等）で行う。授業形態は、オンライン会議ツールZoomやWebexを利用した「ライブ配信型」やYouTubeなどの動画共有サイトを利用した「動画配信型」、学生ポータルサイトPorTaIIや授業支援システムmanabaなどを利用した「課題提出型」など、教員によって様々である。

6月上旬に取材した学生からは「徐々に遠隔授業に慣れてきた」との感想が聞かれた。また「通学不要のため、1時限目を受講する場合も、朝食の時間を十分に取ることができ、余裕をもって授業開始を迎えることができている」「アプリを利用し、授業に関する情報を一箇所にまとめている」「長い時間パソコンの前に座るため、目や肩が疲れる。授業の多い1・2年生は大変なのではないか」などのコメントが寄せられた。

2020年度の春学期授業は8月15日（土）まで。

第48回学生懸賞論文 募集開始

学生懸賞論文は、昭和48年に本学創立10周年記念企画の一つとして始まり、今年で48回目を迎えます。学生の皆さんの応募をお待ちしています。詳細は、大学ホームページに掲載の「応募要項」をご確認ください。

- テーマ 自由課題（特に定めません）
- 応募締切 10月23日（金）
- 応募方法 PDFファイルを以下まで提出
獨協大学総合企画課 学生懸賞論文係 kronbun@stf.dokkyo.ac.jp
※メールのタイトルに「第48回学生懸賞論文応募」と明記
- 賞 最優秀賞 賞状及び副賞10万円
優秀賞 賞状及び副賞5万円
※応募者全員に記念品（QUOカード千円分）を贈呈
- 入選発表 本学ホームページ、大学内掲示板、「獨協大学ニュース1月号」に掲載予定。
最優秀賞の本文を「獨協大学学報」、最優秀賞と優秀賞の要旨を本学ホームページに掲載予定。

[獨協 学生懸賞論文](#) [検索](#)

ぶらりらいぶらり vol. 96

レポート作成にオンライン資料を活用しよう!

オンライン授業も後半に突入し、学期末のレポートが出題される頃ですね。レポートは準備が肝心。まずは作成の手順と図書館HPから使えるツールを確認しましょう。

●テーマを決める

何について論じるのか、まずは出題されたテーマを確認。もしテーマが広すぎる場合には、授業で学んだことを踏まえながら興味のあるテーマに絞り込んでみよう。

●事前調査

テーマに関する用語を調べて、概念や背景を把握しよう。「Japan Knowledge Lib」はさまざまな分野の辞書や百科事典を一度に検索できておすすめのデータベース。また入門書やハンドブックはそのテーマ全体を把握するのに便利です。8月15日までは全文試読み実施中の「Maruzen eBook Library」や「KinoDen」にアクセスして関連する本を探してみよう。

●構成を考える

事前調査が済んだら、レポートの構成を考えよう。どうしてそのテーマを扱うのか（問題提起）、今ある課題や事例（現状）、仮説や解決策（考察）、自分なりの考え（主張）などを箇条書きにしたら、読む人に伝わりやすい順に並べ替えてみよう。

●資料探し

構成が決まったら、裏付ける根拠資料を探そう。Web上で公開されている資料も多いけれど、中にはレポートに向かない不確かな情報も。図書館HPの「データベース一覧」や「オンラインブック」を使って、信頼性の高い資料を集めよう。

●本文の執筆

構成に沿って、調べた資料やデータで肉付けをしながら、自分の意見を書いていこう。自分の意見と、それを書くために参考にした「他の人の意見」は明確に区別して。参考にした文献を参考文献としてリストを文末に付けよう。

●仕上げ

レポートが完成したら、誤字脱字はないか、指定された形式（書式）になっているか見直して、いざ提出。

資料探しやデータベースの使い方に困ったら、蔵書検索（OPAC）の「MyLibrary」の中の「オンラインレファレンス」で相談することができます。※データベースやオンラインブックの学外からの利用にはVPN接続が必要です。

午後の談話室

第25回

経済学部 国際環境経済学科

米山 昌幸 教授
Masayuki YONEYAMA

獨協大学経済学部卒業。立教大学大学院経済学研究科博士前期課程修了、チェース・マンハッタン銀行を経て、神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学。1993年に本学経済学部専任講師として着任、2004年より現職。博士(経済学)。

主要担当科目: 国際貿易論

研究分野: 国際貿易理論が専門だが、貿易と環境、貿易と開発など、持続可能な開発のテーマに関心をもつ。

学生へのメッセージ: 「国家間の貿易は最も誤解が多い分野。一見すると正しそうに見えることが、理論分析によってじつは間違っていることがわかったりします。学生にはグローバルな視点と理論的な思考方法を身につけてもらいたいです」

好きな言葉: 一期一会

好きな音楽: ZARDの楽曲にはいつも力をもらっているという。「坂井泉水さんの1周忌の追悼コンサートにも行った。体力が落ちた最近では、マラソンの40キロ過ぎで『負けないで』がスピーカーから大音量で流れてくると涙が出る」と話す。

SDGsに自分事として取り組む

学生だからこそできること

キャンパスのわきを流れる伝右川の再生から、地域活性化、地球温暖化問題、そして途上国の貧困問題まで。米山先生は、「持続可能な社会を創る」という理念を掲げて学生のさまざまな活動をサポートしている。

「学生には『君たちがやりたいと持ってきたものは、ぜんぶ実現させる』と言っています。でも、学生が躊躇しているときには私が先導してやることもあり。社会に学生を連れ出し、アクティブに活動するというのは国際環境経済学科のコンセプトの1つです」

2016年12月に始まった「獨協大学環境週間・EARTH WEEK DOCKYO」も、そうした活動の一つだ。エコをテーマにイベントを開催したいと声を上げたのは、当時4年生になっていた国際環境経済学科の1期生。企画立案から開催までやり抜いた実行委員会の学生たちは、準備の大変さに次回開催は1年後を考えていたが、米山先生は電力需要期となる夏冬の年2回開催にするよう鼓舞した。回を重ねるにつれ他学部の学生も実行委員会に加わり、今では大学全体を巻き

込んだイベントになっている。

「若い学生だからこそできる提案があるし、学生だから受け入れてもらえる。社会の抱える課題を自分事として取り組むことができれば、学生には十分に社会を変える力があるので。なによりも学生自身が地域や行政の方から『よくやってくれたね』と声を掛けてもらえれば、やりがいも感じ、自信にもつながります」

これまで、コンテストや事業に参加したい学生を全学から募集してきた。指導したチームがコンテストやコンペに出場して賞を獲得したり、新聞社の取材を受けたりすることも。これまで埼玉県や福島県など、自治体が主催する事業にも参加している。

出会うをひるひるひる

そうした成果を喜びながら



も、米山先生は「企画提案した活動を通して、向き合った課題は解決されたのか」と、改めて学生たちに問いかける。「一度きりでのコンペやイベントで終わらせず、持続的な取り組みにすることを強調する。また、学外の活動が増えるにつれて新しいつながりが生まれて、学外からさまざまな依頼も舞い込むようになった」。

「プロジェクトが増えるばかりで、忙しくなる一方です(笑)。それでも、SDGs(持続可能な開発目標)に向けて学生が挑戦する機会をもっと増やしたいし、興味を持っている学生ともっとつながっていききたい。そして、『持続可能な社会を創る』という理念を全学に広めて、次の世代の学生へつなげていきたい」

この春からはキャンパスに学生がいけない期間が続いている。「直接顔を合わせて話をすることの大切さを再認識しました。早く、学生と活動できる日々が戻って欲しいですね」

MY LINK, MY LINE

米山先生が生まれたのは、獨協大学の開学と同じ1964年。高校までを故郷・山梨で過ごし「語学の獨協、というグローバルなイメージにもひかれて」本学に進学。大学時代から趣味で市民マラソンに出るようになって、今でも走り続けている。また発展途上国の債務・貧困問題に取り組んだゼミでの先生や仲間との出会いは、その後のキャリアへとつながるものに。大学院への進学、母校への着任、自ら学科名を考案した国際環境経済学科の設立など、人生の節目で先生を導いたのは、それまでに出会った人たちとの“縁”でした。

多くの学生と親しく関わり、相談ごとにも親身になって応える米山先生。親しみやすさと人懐こさから「学生には、パーソナルエリアが狭すぎ!」と言われてます(笑)」

仕事の現場から

Vol.12

卒業生に
仕事についての喜びや、
獨大生に向けてのメッセージを
語っていただきます。

野球から学んだ「適材適所」で
仲間の力を最大限に引き出す



東日本電信電話株式会社
営業推進本部ブロードバンド営業推進室
安達 友行 さん(13年済卒)

私が所属しているのは、不動産業界への営業に特化したチームで、現在ニーズが高まっているRPA（※）やAIの活用、テレワークに関するサービスの案内しています。不動産会社の業務は、入居申込書や契約書をはじめ書類が非常に多いのが特徴です。また、マンション管理会社では、管理物件の光熱費の

支払い処理を行うために、経理担当者が毎月データを打ち込むといった手間のかかる作業も少なくありません。こうした状況を改善するために、書類の電子化やルーティンワークの自動化などを提案し、業務を効率的に行うお手伝いをしています。

いま私が携わっている新たなサービスは、不動産会社の業務・経営に深く関わるものです。そこで重要となるのが、クライアントの業務内容をしかりと理解し、現場での「困りごと」を発見することです。

各企業の経営層に直接ご提案できる機会も多く、着実に実績を上げられているのは、先輩達が築いてきたお客様との信頼関係のおかげです。蓄積された関係性や知見に基づいて新しい価値を創り出していけるところに、やりがいを感じています。

今年で入社7年目になりますが、営業職として年次を重ねるにつれ「チームのメンバーと一緒に成果を出すこと」を考えるようになってきました。そこで役立つのが、入社1年目から約4年間携わった、家電量販店での業務管理の経験です。各店舗で弊社のインターネット回線をお客様にご案内する際、スタッフの強みを最も活かせるように一人ひとりのスキルや特長を「見える化」し、配置や役割を最適化していきました。これらの取り組みが、



在学中は準硬式野球部に所属。現在は草野球を楽しんでいます。

安達さんのある一日のタイムスケジュール



不動産業界に新しいサービスを展開する現在の職場でも活かされていると思います。

学生時代を振り返れば、ゼミ長を務めた際には「どうしたらゼミ生がまとめて、楽しく取り組めるか」を常に考えていました。こうした「適材適所」の意識や「たいへんなことでも楽しみながらできる方法を考える」「誰かのミスも、チームでカバーする」といった考え方の源泉になっているのは、幼い頃から続けた、野球を通じた経験です。

卒業した現在も、就職を控えた獨大生と話す機会があります。そこで感じるのは「大学の中だけでなく、周りをもっと広く見てほしい」ということ。その上で自分の強みやポジションを見つけ出せると、就職活動に取り組み際にもきっと役立つものになると思います。

2019年度 「学生による教育環境改善のためのアンケート」実施報告

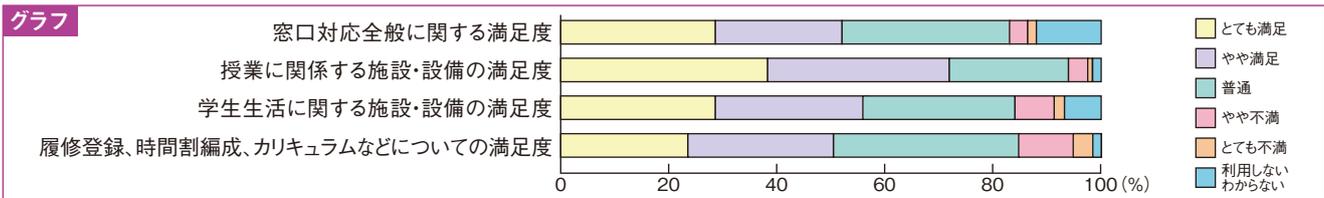
実施概要・調査方法 「学生による教育環境改善のためのアンケート」は学部生、大学院生、聴講生などのみなさんから意見を広く集め、窓口や施設に対する満足度を調査し、課題を発見することを目的としております。

アンケートの内容については、選択式と自由記述式をとり、選択式では窓口サービスや施設の設問に対しての満足度調査をしました。また、自由記述式では、設問にある窓口、施設を具体的に選択させ、それに対する満足度とその理由の記述を求めました。

2019年度からは、このアンケートは紙媒体からPorTaIIでの実施に移行しました。実施は、原則、第13回目あるいは第14回目の授業日(最終授業日)(12月17、18、23日、1月8～11、14、16、17、20、25日)の指定クラスにて教員から学生への指示の下で行いました。指定クラスを履修していない学生や欠席者などに対しては、1月8日～2月10日の間に授業時間外で各自アンケートに回答するようPorTaII個人向け掲示板、電子メール、学内掲示により呼びかけました。

集計方法 選択式については、それぞれの設問に対し集計をおこない、また自由記述については、回答者が入力した原文をそのまま集計しました。なお、集計の際には学生個人を特定するデータは一切含まれておりません。

結果報告 学部生、大学院生、聴講生など合わせて8,401名の対象者の内、2,020名のみなさんから回答いただきました(回収率:約24.0%)。そのうち学部生、大学院生については、それぞれ所属別・学年別に満足度を集計しました。各設問に対する回答者全体の満足度の結果は**グラフ**の通りです。自由記述については、回答者個人を特定できないように資料を作成し関連事務局へ渡しました。個々に対する質問には回答しませんが、「自由記述に対する事務局からのフィードバックコメント」として大学からの回答(概要)を以下に掲載します。詳細は、ホームページをご覧ください。



今後について 今後は「事務局自己点検・評価委員会」を中心に、アンケート結果に基づく課題点を抽出し、その検討及び改善に取り組みます。なお、活動状況・改善報告等については、アンケート結果に対してのフィードバックコメントとして回答するとともに、適宜、大学ニュースやホームページにて報告します。

概要

1. 2019年度の教育環境改善報告

2018年度のアンケート結果を受けて行った2019年度の改善について報告します。

2019年度は、「100分授業の開始と国際化・グローバル化教育の推進」、「創立50周年記念館(西棟)の竣工と今後のランドスケープ計画等」、「現行諸制度と組織の検証とさらなる改革強化策の構築」という大学運営基本方針、また予算編成方針のもとに改革を進めてきました。

ハード面では、「CLEAS(クレアス)」を中央棟1階に開室し、学生のみなさんの自律学習を促す環境を整備しました。また、より快適な食環境の改善のため、学生食堂をリニューアルオープンしました。ソフト面では、天野貞祐記念館2階に国際交流センター、日本語準備室を集約し、「Global Frontier プロジェクト」を始動させました。また、SNSや動画配信等といった多様なニーズに応えられるように大学ホームページをリニューアルしました。

事務局では、本学全体の重要課題に取り組みつつ、従来から、窓口対応、授業関連施設、学生生活施設の改善をはじめとする、諸施策を推進してきました。社会の変化と学生のみなさんのニーズの変化に対応するため、本アンケートで挙げられた要望をもとに教育環境の改善を着実にものにしていきたいと思います。

■ 窓口対応

- 学生のみなさんからの指摘やご意見について各部課室で話し合いをおこない、速やかな改善に取り組みました。
- 「挨拶」、「丁寧」、「正確」のスローガンと教育的配慮に基づいて、学生のみなさんとの良好な関係づくりや、積極的な情報発信などに取り組みました。
- アンケートの要望から、窓口対応に関するガイドライン(行動基準)のひとつにワンストップサービスを心がけるという文章を追加しました。

■ 教育研究施設

- 人工芝グラウンドはAコート、特にサッカーフィールドの損傷が目立ったため、スポーツ施設管理業者による検分を実施しました。
- 35周年記念館の外壁改修をおこない、3月末までには西面と北面の工事が完了しました。

■ 学生生活施設

- 学生食堂のメニューについては、特別メニューなど月ごとにイベントを開催し、好評を博しています。また父母の会とゼミ活動のコラボレーションによる野菜摂取を促すプロジェクトなども実施し、学生食堂の充実を図るよう努めました。
- トレーニングルームでの「レディースタイム」の検討について、試験運用の準備をする過程で、女子学生の利用者、トレーニングルームの受付を委託しているスタッフにヒアリングしたところ、「レディースタイム」の設定までには必要ないのではとの声が多数あり、試験運用に至りませんでした。

2. 2019年実施のアンケートに対するフィードバックコメント

■ 窓口対応

- 「親切だった」、「対応がよかった」などの意見をいただいておりますが、「無愛想で不親切な人もいる」などのコメントもありました。この点については今後、「事務局自己点検・評価委員会」を通じて、窓口スローガンである「挨拶」、「丁寧」、「正確」の意識のさらなる徹底を図ります。

■ 教育研究施設

- 無線LANについて、教室、図書館、学生センターを中心に無線LANの安定稼働に努めていますが、全体の利用状況や建物事情により電波の状況が悪いことがあることをご理解ください。常態的につながりにくい場所がありましたら、東棟4階ヘルプデスクまでお伝えください。
- コンセントの数について、4棟や6棟の建設時には現在のような利用形態を想定しておらず数は少ないですが、新しい建物ではコンセントの数を増やしました。また、コンセントについては、電気容量の関係もあり容易に増やせない事情があることをご理解ください。
- 人工芝グラウンドの競技用ラインについて、2020年度末に人工芝グラウンドの芝を張り替える予定ですので、ラクロス以外も含めて最新ルールに準拠できるよう、ラインの位置を更新します。それまでは個別の対応が出来ない旨、ご理解ください。
- 西棟3階のラーニング・スクエア1・2は、2020年度中にスタッフを配置して、自律学習で使用するための機器類を整備することを計画しており、中央棟1階のCLEAS(クレアス)と連携した、新たな自律学習スペースとしてリニューアルする予定です。時期は未定ですが、今後、大学ホームページ等でお知らせします。
- ICZについて、3Fロビーでおこなっている英語ニュース放送については、音声だけではわかりにくいというご意見もありましたので、スクリーンに映像も同時に流すことで、外国語の空間を提供する工夫をします。この空間は単なるラーニングコモンズではなく、外国語のコミュニケーション空間でもあることをご理解ください。
- コンピュータ教室について、プリンターの設置や有償ソフトウェア追加のご要望をいただきましたが、授業内容や教室の状況、費用等の状況から、すべての教室を同一とすることはしておりません。プリンターは2019年3月末にオープンした中央棟1階の自律学習スペース「CLEAS(クレアス)」にも設置しました。モノクロに加えカラーも用意しており、学習目的で利用することができますのでご利用ください。

■ 学生生活施設

- 学生食堂をはじめとする学内の飲食店舗について、メニュー改善やコンビニエンスストア増設などの要望をふまえて、引き続き食環境改善を図ります。
- 各スタジオの防音効果に関して、壁面の補修などに随時取り組んでいきます。ドアの開閉は音を出していない時のみ行うよう、引き続き利用の際はご協力ください。
- 2019年度の喫煙者数の日ごとと平均は前年に比べて大幅に減少しています。引き続き分煙ハットロールに加えて、ポスター掲示などを通して、受動喫煙防止や健康増進のための啓発活動を実施します。吸わない人の健康だけでなく、吸いたい人の吸う権利も守りたいと思います。そのためにも、指定場所以外では絶対に喫煙しないようにしてください。

■ その他

- 100分授業について、様々なご意見をいただきました。授業時間変更については、大学設置基準に定められた単位取得に係る授業時間数の確保のため、2019年度から実施しました。2020年度も引き続き、100分授業導入による、新たな学びの形が展開していくよう教育の質保証に努めます。
- ホームページやPorTaが変わりすぎて使いづらいのご意見をいただきました。使い慣れるまでご不便をおかけしますが、仕様等につきましては今後も改善に努めます。

この記事の詳細はHP「獨協大学の自己点検・評価活動」のページ内にある「学生による教育環境改善のためのアンケート」をご覧ください。

<https://www.dokkyo.ac.jp/about/selfmonitor/selfmonitor.html>

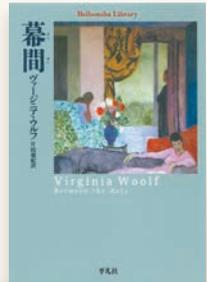


本箱 *Books column*

本学の先生方が執筆された新刊情報。
授業の中だけでは見られない
先生の違った一面に触れることができます。



浦部 浩之(言語文化学科教授)分担執筆
『現代地政学事典』
丸善出版 2020年1月 24000円
私達をとりまく現代社会について、「空間」「人々」「境界」から、「私達は何におびえ、どう乗り越えるのか」を問おうとする学問、地政学。海外の研究成果も紹介しつつ、大きく6章で構成。地球社会の脅威を認識し乗り越えるための「新しい地政学」の構築を目指す一冊。



片山 亜紀(英語学科教授)訳
(ヴァージニア・ウルフ 著)
『幕間』
平凡社 2020年2月 1400円
ヨーロッパ各地で独裁者が台頭し再び戦争の影が迫りつつあった頃。英国の古い屋敷では野外劇が上演されようとしていた。一昼夜の出来事に、田園の日常と、時代の気配を見事に描き出したヴァージニア・ウルフの遺作、待望の新訳。



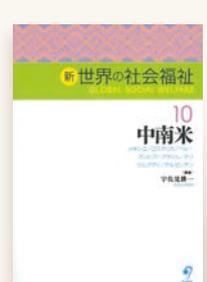
山口 誠(交流文化学科教授)著
『客室乗務員の誕生
「おもてなし」化する日本社会』
岩波書店 2020年2月 840円
日本独自の発展を遂げ、就職先として盤石の人気を誇る「CA(キャビン・アテンダント)」。日本の客室乗務員の歴史を通観し、「接客マナー」と「自分磨き」の技法と思考が独特な「おもてなし」の源流となっていく過程を考察する。



藤村 好美(経済学科非常勤講師)分担執筆
『生涯学習のグローバルな展開
ユネスコ国際成人教育会議がつなぐSDG4の達成』
東洋館出版社 2020年2月 2400円
成人教育をめぐる国際的動向を整理しつつ、日本の生涯学習・社会教育の課題を捉え直し、その方向性を展望していく。グローバルな視点で捉えることで、いま話題のSDGsについても考察。日本のこれからの生涯学習の在り方を提案した一冊。



山内 敏弘(名誉教授)著
『安倍改憲論のねらいと問題点』
日本評論社 2020年3月 2000円
安倍改憲論のねらいと問題点を、自民党が発表した自衛隊の9条加憲などの4項目の改憲案に即して具体的に明らかにする。



浦部 浩之(言語文化学科教授)分担執筆
『新世界の社会福祉 第10巻 中南米』
旬報社 2020年3月 第II期6巻セット60000円
世界の社会福祉が俯瞰できる比類のないシリーズの第10巻。「児童虐待」「貧困と格差」「障害者福祉」など、国内はもちろん世界的にも注目されるテーマについて、中南米の各国がどう対処しているのかを紹介。日本との比較研究に最適な資料。



浦部 浩之(言語文化学科教授)分担執筆
『資源地政学
—グローバル・エネルギー競争と戦略的パートナーシップ』
法律文化社 2020年3月 2700円
「持続性」概念から地政学的経路や障壁を俯瞰したうえで、資源貿易が政治体制や民族問題の構図にどのような影響を与えているのかを考察。地政学的観点から資源をめぐる国際政治動向を学ぶことができる一冊。



立田 ルミ(名誉教授)編・著
今福 啓(経営学科教授)、堀江 郁美(経営学科教授)著
『実践に役立つ情報処理
—基礎から応用まで—2020年度版』
日経BP社 2020年3月 1900円
大学での情報処理の授業で課題を達成するにはどのように利用すればいいか、コンピュータでどのように問題を解決していくか、という実践的な観点で解説。Webページの作成やプログラミングの基礎についても学べる教科書。



ヴェスイエール・ジョルジュ(フランス語学科専任講師)著
『仏検4級・5級対応
クラウン フランス語単語 入門』
三省堂 2020年4月 1600円
「フランス語で伝えてみたい」という声に応える基本単語帳。ナチュラルな例文と、会話で使える実践的ダイアログで「発信力」を高める。名詞の性が感覚的に覚えられるよう、女性・男性の声で収録された音声データも無料配信。基本1500語レベル。

■ 獨協大学ニュース「本箱」欄に掲載する新刊情報をお寄せください。

本学教職員(非常勤講師含む)が執筆した単著・共著・分担執筆・監修・翻訳書などの新刊情報を募集しています。新刊がありましたら、中央棟2階総合企画課までご持参ください。表紙撮影後、返却いたします。

獨協大学父母の会 「学生チャレンジ支援プログラム」 審査結果

獨協大学父母の会では、本学学部学生のチャレンジ活動に対して、助成や顕彰を行う「学生チャレンジ支援プログラム」を実施しています。

2019年度第5期申請(1月10日～3月31日) / 2020年度第1期申請(4月1日～4月30日)では、チャレンジ活動顕彰3件の申請があり、審査結果は以下のとおりです。

※審査は新型コロナウイルスの影響により、ひと月遅れとなりました。

【チャレンジ活動顕彰】

2019年度第5期申請

■土方 美沙希・竹内 大輔ペア(獨協大学舞蹈研究会所属)

東部日本学生競技ダンス連盟主催「第105回東部日本学生競技ダンス選手権大会I部戦」ルンバの部 第1位など、計10項目の申請に対し、76,000円の顕彰金を贈呈。

■フォードカーク 龍馬・中山 みずほペア (獨協大学舞蹈研究会所属)

全日本学生競技ダンス連盟主催「第64回全日本学生競技ダンス選手権大会」ワルツの部 第2位など、計8項目の申請に対し、85,000円の顕彰金を贈呈。

2020年度第1期申請

■Five Oysters (代表・阿保 利圭子 / 環4年)

Hult Prize Foundation主催「Hult Prize on Campus Final」にて第2位に対して、41,000円の顕彰金を贈呈。

現在、2020年度第3期申請を受付中です。(10月31日締切) 応募詳細は父母の会事務局まで。

問合せ・申請先:獨協大学父母の会事務局
(中央棟2階・総合企画課内) ☎048-946-1962

獨協学園及び獨協大学の財政開示について

獨協学園及び獨協大学の財政状況は、例年、本ニュース7月号に掲載していましたが、今年から大学ホームページでの開示とします。

こちらをご覧ください。掲載は、7月中旬を予定しています。
URL <https://www.dokkyo.ac.jp/finance/>

9月卒業式・学位記授与式

日 時:9月27日(日) 10:00～

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、今年は以下のとおり実施します。

- 式典は学部別に天野貞祐記念館の各指定教室にて実施します(全学部の卒業生が一堂に会した式典は行いません)。
- 式典実施後の祝賀会は行いません。
- 当日は、卒業生のご父母の方の出席はご遠慮ください。
- 卒業生は、当日学生証をご持参ください。

今後の新型コロナウイルス感染症の拡大状況によっては内容が変更となる場合があります。詳細は改めてPorTaIIおよびホームページでご確認ください。

2020年度春学期 「学生による授業評価アンケート」に ご協力ください

詳細はPorTaII→「ダウンロードセンター」→「学生用フォルダ」→「授業評価(教育改善)アンケート」の資料を確認してください。

期 間:2020年8月3日(月)～8月16日(日)

対 象:全学生

回答方法:PorTaII上で回答

所要時間:約30分

問合せ先:自己点検・評価室(6棟1階)

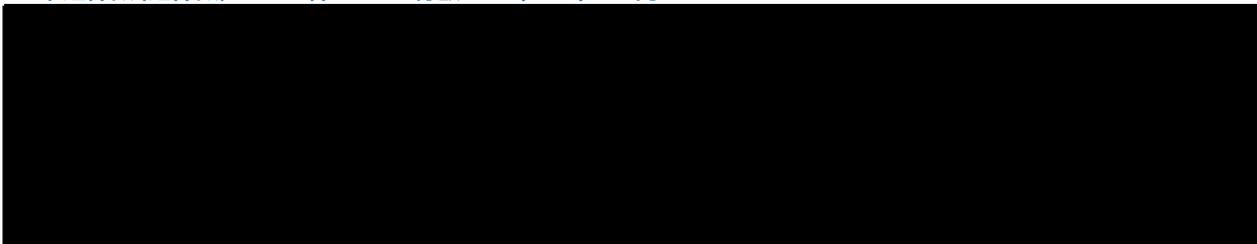
☎ 048-946-1824, 048-951-2666

✉ jikotenken@stf.dokkyo.ac.jp

奨学基金充実のための寄付金募集事業報告

寄付者ご芳名(2017年10月1日～2020年4月30日現在)

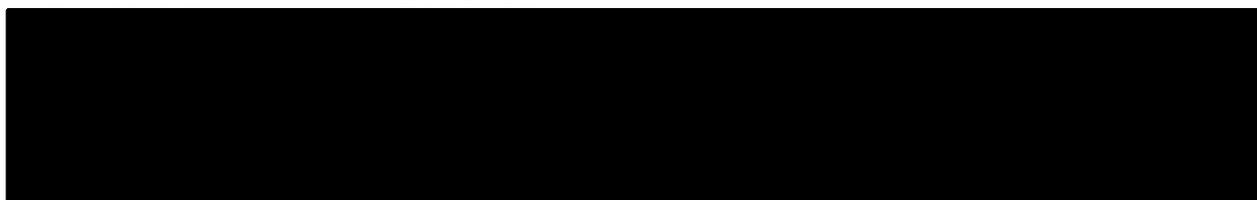
■ 申込件数(延件数): 497件 ■ 総額: 19,762,000円



教職員による学生の学業継続支援のための寄付金募集

(2020年5月26日～6月20日現在)

■ 申込者数: 88名 ■ 総額: 14,348,817円



編 集 総合企画部(中央棟2階) TEL048-946-1635 kouhou@stf.dokkyo.ac.jp

学 生 記 者 伊藤 あす美(国関法2年) 宇野 季咲良(営4年) 遠藤 夏乃(済2年) 遠藤 瑞稀(言4年)
[五十音順] 川上 徹也(環3年) 窪田 実優(英4年) 越川 響(律4年) 小林 優麻(律3年)
高橋 弘行(済2年) 土屋 香奈(英4年) 名取虎之介(言4年) 初澤 汐里(独3年)
深見 勇斗(国関法4年) 古田 千夏(独3年) 保科 南実(交4年) 目谷 望実(営4年)

